

新カゾクの時代 ~ファミレス社会で おひとりさま高齢者をどう支える~

■ 本号は、65歳以上の単身者が増え、単なる高齢化社会でなく「おひとりさま高齢社会」へとその内実が変わっていき、「家族」の果たしている役割や機能がなくなった「ファミレス社会（＝ファミレス社会）で果たした誰が、何が新しい「カゾク」となっているのでしょうか。本誌は7月、ケアタウン総合研究所（高室成幸代表）との共同企画としてセミナーを開催しました。ゲストはルポライターの末並俊司さんと、「ファミレス社会」という言葉の生みの親、高齢社会をよとする女性の社会政策の権威恵子さん。お二人の講演主旨と高室さんをお招きのパネルディスカッションをダイジェストでお届けします。

をする労働組合など、山谷の人たちをケアするために実にさまざまな団体が活動している。しかも外から入ってきた人たちだけでなく山谷に大昔からあるお寺やホテルなどの地域資源も、混然一体となって山谷の人たちを支えているのだ。私ははそれが山谷版の地域ケアシステムのようなものに見えた。

そして、本を書くなかで、山谷に広がるケアシステムとは、家族の代替機能ではないかと強く感じるようになります。日雇い労働者という理由で山谷に流れ着いて、家族と断絶された方が多く、要するに、生来のファミリーレスです。そういう人々たちをここから来ようとも受け入れず、その労働者を助けるための団体も受け入れず、山谷の場合はいわゆる「おひとりさま山谷」という本質にまでなっています。自然にみんなが集まっている。自然に湧いてきたような地域包括ケアシステムが成り立っているとは感じています。

山谷で路上生活に仕立てられている人も、そして支援も、誰もがどこかにつながっていて、いつも誰かを気にかけています。その意味でも本当にファミリー。疑似家族になっている。

山谷で路上生活に仕立てられている人も、そして支援も、誰もがどこかにつながっていて、いつも誰かを気にかけています。その意味でも本当にファミリー。疑似家族になっている。

山谷で路上生活に仕立てられている人も、そして支援も、誰もがどこかにつながっていて、いつも誰かを気にかけています。その意味でも本当にファミリー。疑似家族になっている。

山谷で路上生活に仕立てられている人も、そして支援も、誰もがどこかにつながっていて、いつも誰かを気にかけています。その意味でも本当にファミリー。疑似家族になっている。

山谷で路上生活に仕立てられている人も、そして支援も、誰もがどこかにつながっていて、いつも誰かを気にかけています。その意味でも本当にファミリー。疑似家族になっている。

山谷で路上生活に仕立てられている人も、そして支援も、誰もがどこかにつながっていて、いつも誰かを気にかけています。その意味でも本当にファミリー。疑似家族になっている。

山谷で路上生活に仕立てられている人も、そして支援も、誰もがどこかにつながっていて、いつも誰かを気にかけています。その意味でも本当にファミリー。疑似家族になっている。

山谷で路上生活に仕立てられている人も、そして支援も、誰もがどこかにつながっていて、いつも誰かを気にかけています。その意味でも本当にファミリー。疑似家族になっている。

山谷で路上生活に仕立てられている人も、そして支援も、誰もがどこかにつながっていて、いつも誰かを気にかけています。その意味でも本当にファミリー。疑似家族になっている。

山谷で路上生活に仕立てられている人も、そして支援も、誰もがどこかにつながっていて、いつも誰かを気にかけています。その意味でも本当にファミリー。疑似家族になっている。

高齢者がいる高齢者世帯のうち、単身者だけの「おひとりさま高齢者世帯」は19.7%でしたが、20年経った現在は28.8%。高齢夫婦のみ世帯は32.3%で、なんと6割超が高齢者だけの世帯になったのです。かつて標準家庭とされた3世代世帯はたった9.4%。一部には介護保険なんか作るから親を安易に放り出すようになってしまったなどと言う人も見られ、これまでどれほど悲惨な状況になるか、数字の変化だけで十分明白でしょう。

私はやはり家族ができる世帯をすることは、人類が引き継いできた文化として、大事にしていってほしいと思います。

高齢者がいる高齢者世帯のうち、単身者だけの「おひとりさま高齢者世帯」は19.7%でしたが、20年経った現在は28.8%。高齢夫婦のみ世帯は32.3%で、なんと6割超が高齢者だけの世帯になったのです。かつて標準家庭とされた3世代世帯はたった9.4%。一部には介護保険なんか作るから親を安易に放り出すようになってしまったなどと言う人も見られ、これまでどれほど悲惨な状況になるか、数字の変化だけで十分明白でしょう。

私はやはり家族ができる世帯をすることは、人類が引き継いできた文化として、大事にしていってほしいと思います。

パネルディスカッションの部

高室成幸さん
ケアタウン総合研究所代表
京市出身。日本経済大学卒業。2000年、ケアタウン総合研究所設立。ケアマネジャーをはじめ地域包括支援センター、施設などケアマネジメントと地域包括ケアシステムを軸とした研修・コンサルテーションを行っている。近著に「地域ケア会議・コーディネーターブック」（第一法規出版）など。著書・監修書多数。

「ファミリーレス」から 疑似ファミリー社会へ？

高室 ここから3人でのディスカッションです。樋口さんが90代、私が60代、末並さんが50代。世代が異なる3人です。それぞれ家族構成がありそうですね。家族がどんなふうに変わってきたのか、お2人の実感から話を始めていきたいと思っています。まず50代の末並さんから。

末並 かつて当たり前の3世代家族はいわゆる「サザエさん」時代。そして核家族の「クレヨンしんちゃん」時代へと変わっていききました。僕は「クレヨンしんちゃん」時代の人間ですね。郊外の一軒家で家族4人がベットの犬を飼って住んでいる——みたいなのがオールドファッションなのですが、それも今ではかなり手の届かない家族になっています。2人家族やシングルも多いし、本当にどんなに家族が小さくなっていくという印象です。

樋口 決してすべての家族が小さくなっているわけではないと思いますが、以前のように一緒に暮らすのは難しくなっているのが時代の流れではないでしょうか。私の知合い

しかしそれも無理がなく、家族がつかないようには支えながらやっていくことが大事なこと。総理大臣をはじめとする国の指導者も行政も専門家も、そして地域のリーダーたちにも、そのことをききと顔に入れて今後の社会をリードしていただきたいと強く思います。そして自分自身も、これからの家族が果たなければならない役割は何か、家族に代わって果たせる立場の人がいるとしたらどこだろう。おひとりさまを支えることができる社会に向けて答えをだしていきたいと思います。

で北海道で広い敷地に大きな家を建てて4世代家族で暮らし始めた方がいますが、結局上手い手いなくて2世代ずつ分かれてお住まいになりましたね。経済的に裕福だからできたのでしょうか。

末並 若者の間では、子育てでコストパフォーマンスが悪いと本気で考える人が増えているらしいです。家族は怖いものだと捉える人もいます。それはある意味理解できます。私の家庭は一人息子なんですが、1人育でただでさえ大変な努力とコストがかかる、これは2人だったらどうしようかと本気で思いますが、そういう意味では家族が増えるというのは嬉しい、嬉しいことでもあるのに、怖いんですね。

樋口 現代の家族の怖さという身内の争い。その種は、やはり介護と相続です。私は読売新聞の人生案内の回答者を担当しているのですが、先日、私に与えられた質問で、介護と相続をめぐって、2人の兄弟が争った話がありました。少数派だからどちらにも負けたくない。兄弟は他人の始まりなんて言いますが、2人しかいないと限も無いのです。

高室 今回タイトルにした「ファミレス社会、ファミレス社会」という言葉も実に怖い。生みの親は樋口さんですがそのいきききき聞かせていただけますか。

樋口 私が「ファミレスをファミレスと呼ぶのは、かつては家族連れでにやわってファミレスレストランが、今や見返すと家族よりも1人、2人で利用しているのが当たり前になってきたからです。「ファミレスレストラン」だわね前にならうに、耳に馴染んだ方が多いようです。

山谷は自然に生まれた 地域包括ケアシステム



末並俊司さん

1968年生。北九州市出身。雑誌記者、ルポライターとして週刊文芸などを中心に取材。執筆、講演。上梓したノンフィクション『マイホーム山行』（小学館）は2021年、小学館ノンフィクション大賞受賞。

私は2010年ごろから東京の都心と呼ばれる山谷の取材に入り、通い続けているうちに地域の高齢化とそれを支えているケアのネットワークが見えてくるようになり、2018年から本格的に取材をして「おひとりさま山谷」という本にまとめた。

最初に興味をひかれたのは、山本雅基さんという人が立ち上げた「きょうのいえ」という民間ホスピス施設でした。いわゆる病院のホスピスではなく生活困窮者など誰でも受け入れ、看取りも行い、やがて逝く人にとっての終いの住処です。山谷にはこの「きょうのいえ」のほかに「ふるさとの会」「訪問看護ステーションコスモス」、炊出しなど

膝から孫がはみ出す時代！ 直視した政策を



樋口恵子さん

1932年生。東京都出身。東京大学卒業後、時事通信社、キヤノンと文芸春秋を経て、高齢社会をよとする女性の社会政策の権威。厚生労働省社会政策審議会、内閣府男女共同参画推進委員の理事と子育ての両立支援に関する専門調査会会長など担任。人生100時代の創刊（三栄出版）の編集（中央公論新社）など著書多数。

かつて日本では、高齢者にとって幸せな生活とは、養子3世代が同居して、孫を懐に抱きながら夕食のどんちゃんをとること、などと言われていた。ところが、高齢化率は29%超え世界でもまれなトップの高齢国となり、家族のあり方も劇的に変わっています。

年老いた親を子どもたちの誰かが引き取り同居するという暮らし方も変わりました。少子化で子どもの数が減って親を養い取る能力のある家族関係がほとんどなくなったこと、住み慣れた家、親戚との関係のある地域で生きていきたいと願えるお年寄りが増えたからです。

そして、介護保険が充足した2001年に、65歳以上の高